

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
DIGITAL
2015

2015 SUPER GT Rd.1 岡山
SPRING HAS COME
「新たな季節の始まり」

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

Project



長い冬が終わり、季節は巡ってまた春がやってくる。

春の訪れとともにARTAの面々も開幕の地である岡山国際サーキットへと集い、新たなシーズンを迎える。事前のテスト走行で大きなクラッシュを喫しダメージを負ってしまった2015年型ARTA NSX COCNEPTGTも、スタッフたちの懸命の努力によって完全な姿でこの岡山に持ち込まれた。

しかし空は生憎の曇天で、断続的に雨がしとしとと降る。週末のコンディションを読むのは難しそうだった。

「全然温まらない、これ！ でも40周走ることを考えたらレースはこっちのタイヤかな...最初は温まりが悪くて離されちゃうけど.....」

ウェットコンディションの中、決勝前のウォームアップ走行で8号車のステアリングを握った松浦孝亮は言った。8号車の履くハードタイヤとは違い、ミディアムを履く他車は走り始めから異次元の速さで抜いていったと松浦は嘆く。



それに対して監督の鈴木亜久里は言う。

「最初の5周で何十秒も差がついちゃうよ？ ただ走るだけのレースになるぞ？ レースをするんじゃなくて、ただ走るだけのレースでいいのか!？」

結果だけを優先するただのチーム代表ではなく、ドライバーの目線で“レースらしいレース”を第一に考えられるのが亜久里監督だ。それでも松浦とエンジニアの佐藤真治は、その声に甘えることなくハードタイヤでスタートに臨むことを選んだ。

「じゃあ、行ってきま〜す！」

松浦が敢えて軽く無線で言うと、亜久里監督も「格好いいところを見せてよ、格好いいところ！」と松浦を鼓舞する。

一方、3番グリッドを手にしていたGT300を戦う55号車のARTA CR-Z GTは、逆にタイヤのウォームアップが良くハイグリップを得ていた。

スタートドライバーの高木真一が、「ちょっと良すぎるくらいに良いね。朝の走行とは比べものにならないくらいグリップする」と言いながらタイヤを使い過ぎないようにマネジメントして走る。周りを走るFIA-GT規定のマシンたちは相変わらずストレートが速く、今年も苦勞させられる。

「これはもうストレートが違いすぎるよね!？」

「瞬間的に（ハイブリッドの）マップ3を使って抜けない？」

「抜けたら苦勞しないんだけどね……」

エンジニアの一瀬俊浩とそんなやりとりをしながらも、高木は堅実に2位のポジションを取り戻してキープしていく。



「真一、カッコイイよ！」

エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市も高木の走りを讃え、盛り上げていく。

事前の予想通り、5周を過ぎたあたりから8号車松浦のタイヤも次第にウォームアップができ、ペースが上がってきた。「やっとフロントが温まってきた」

「（ホンダ勢トップの）15号車と同じペースで前を追いかけている状態。周りのペースが落ちてきている中でコースケのペースは良いから、このまま行きましょう」



すでにミディアムを履くレクサス勢と同等かそれ以上のペースで走れるようになっていた。「ここからがレースだからね〜！」

松浦のスイッチが入った。見る間に前とのギャップを縮め、次々とオーバーテイクを仕掛けていく。毎ラップのように順位を上げて25周目には5位に上がり、このレースのファステストラップまで記録した。しかし、目の前には雨雲が迫り来ていた。

「ニスモは10分後くらいに一雨来るからステイアウトしろって言ってるみたい」

「ここまできたら引っ張るだけ引っ張った方が良くから、ゆっくりいこう。このまま降るんだったらさ、ステイアウトしてミディアムにしちゃおうよ。ミディアムの37号車が速くなってきてるから。絶対ミディアム！」

ライバル勢がタイヤのタレに苦しみ続々とピットに向かう中で、ハードタイヤで耐えるレースを選んだ松浦は燃費の許す限りに走り続けて順位を上げていった。

一方、55号車の高木は首位のプリウスを追いかけていた。序盤に2位争いでタイムロスした間に開いたギャップは18秒にまで開いていたが、高木はラップによっては2秒も速いタイムで走り、この差は徐々に縮まっていた。

しかしやがて雨が降り始めると、摩耗が進んだタイヤではグリップが確保できなくなってきた。



「雨が降ってきたね。結構スタビいじっても何も変わらなくなってきたよ。全然グリップしなくなった！左フロントがヤバい！もう左コーナーだけで稼いでいる感じだよ」

高木が訴えるが、レース戦略を考えると雨脚の先行きが見えてからでなければピットストップとドライバー交代に踏み切ることにはできない。8号車と同様にこちらも可能な限り引っ張る戦略に出た。

「真一、この雨がどう動くか分からないから我慢して！」

土屋の無線に対して高木も「頑張りますよ～」と応えた。

いよいよ松浦のタイヤは限界に達し、ピットへと飛び込んだ。ガレージ前でドライバー交代の瞬間を待ち受けるのは、このレースがスーパーGTデビュー戦となる若手の野尻智紀だ。昨年スーパーフォーミュラでホンダ勢唯一の勝利を挙げ、いきなりGT500のシートに抜擢された。

練習を重ねたドライバー交代もそつなくこなし、野尻はコースへと飛び出していった。



「12号車は同一周回？ 周回遅れになってるの？」

「同一周回だよ。離されないようについていってね」

「うん、行ける、行ける」 佐藤エンジニアとのやりとりも落ち着いている。

「コースケさん、ダブルヘアピンはどのギアを使ってたんですか？ 後半は前と後ろのタイヤ、どっちが厳しくなるんですか？」

すでにマシンを降りた松浦にも無線でアドバイスを求めるなど、若手らしい謙虚な学びの姿勢が溢れている。そして、鋭い速さもある。

7番手でコースに戻った野尻は、49周目には4位までポジションを上げた。そして前を行く15号車を捕えるべくさらにプッシュしていく。

「残り20周、ピットのあたりは雨粒が落ちてきてるから気をつけて。雨が強くなってきて、ハードタイヤを履いた上位勢のタイムが落ちてきてる。逆に野尻はここが頑張り所だからね！」それに対して野尻も極限状態ながら応える。

「もうギリギリだからちょっと集中したい」

「OK、なんとか頑張って。よろしく。前との差がどんどん縮まってきてるからね。ポジション4。前の15号車と100号車になんとか追い付けるよ」

表彰台を目指す野尻は78周目、ついに1コーナーでチャンスと見定めて15号車のインを突くが、止まり切れずにあえなくコースオフ。

おおきくグラベルの中を走ってコースへ戻る間に失ったポジションは82周目までに自力で取り戻して4位でフィニッシュしたものの、野尻は悔しさを滲ませた。



「ごめんなさい、絶対3位になれた……」

「まあ、予選結果から考えれば大いに喜んでいいと思うけど、悔しいよね」

佐藤エンジニアの声に、亜久里監督も元気よく一言「お疲れさん！」と声を掛けた。

「ペースを落とさずにタイヤマネジメントしながら走るのは難しかったですが、終盤雨が降ってきたので、チャンスが巡ってきたと思いプッシュしました。

3位を狙おうとしてコースアウトしてしまったのはボクのミスですが、あそこで行かなかったらレースじゃないので、頑張りました。やはり500のレースはレベルが高いので、もう少し勉強しなければなりません。また次頑張ります」

野尻にとっては大きな第一歩となり、昨年まで飛躍できそうではなかった浮上できない苦いレースが続いていたARTAにとっても力強い手応えを掴み前進を果たすことができた意義深いレースだった。

そして55号車のステアリングを高木から引き継いだ小林崇志も、難しいコンディションの中でアグレッシブな攻めのレースを展開した。

「（首位の）プリウスはどこにいるの？」

「24秒前にいる。43秒代前半で走ってる」



一瀬エンジニアからの情報に、小林も「頑張るよ！」と返す。

「真一のタイヤは左フロント、左リアがなくなってたから、左前後タイヤは大事に使って。ペース上げると左2本タイヤがなくなるからね、大事に行け」

攻めと守りのマネージメントが同時に要求される難しいコンディション。それでも小林は前のプリウスを追いかけた。何十秒離されていようとも、彼の目に映っていたのは優勝の2文字だけだった。昨シーズンを通して遂げた自分自身の成長が、その自信を与えてくれていた。首位との差はラップごとに縮まっていく。

「残り10周くらいでアタックを掛けるから、今はタイヤ温存、バッテリーの温度も下げるように」

一瀬エンジニアからの指示を守りながらも、小林はハイペースを維持した。

しかしラスト10周を迎える前に空からは再び雨が降り出す。



「雨が降ってきたからさ、ちょっとプッシュさせてもタイヤ大丈夫だと思うよ！」

普段のレース中は8号車に専念して55号車には口を挟まない亜久里監督が言った。ピットガレージでデータや気象レーダー情報を見ているエンジニアも同意し、それに背中を押されるように一瀬が決断した。

「レースの終わりまで雨が降る予報だから、アタックしようか。あと12周。プリウスとのギャップは11秒！」

次のラップでさらに2秒を詰めた小林の走りに、土屋も檄を飛ばす。

「プリウスとのギャップ9秒。小林、優勝狙うぞ！」

小林からは「ハアッ、ハアッ」という息づかいだけの無言の応答があり、ドライビングに集中していることが窺えた。

しかしレースの最終盤を迎えて雨脚は強くなり、コース上は非常に難しいコンディションになってきた。タイヤを使い切りつつあった55号車にとっては、非常にリスクを伴う状況と言えた。



優勝は欲しい。しかし無理は禁物。

今年の自分たちが目指すのは、目の前の勝利ではなく、シーズン終了後の栄冠。その思いがチームの誰にもあった。

「結構水が多くなってきた。後ろとのギャップは？」（小林）

「41秒あるから大丈夫。あと6周だから頑張って」 （一瀬エンジニア）

「小林、雨の量が多くなってきてるから気をつけて。ポジションキープで良いよ」
（土屋エグゼクティブアドバイザー）

小林はスロットルペダルを踏み込みたくなる右足をグッところえて、コース上に留まり続け2位でチェッカーを受けた。

「う〜ん、雨が降ってきてからラップタイムが伸びなかった。でも本当に良かった。みんなありがとう」

やや申し訳なさそうに言う小林に、土屋は「よくやった、よく頑張ったぞ！」とねぎらいの言葉をかけた。

「そういえば、優勝以外で表彰台に上がるのは初めてじゃない？」

小林がふと言った。その通りだった。そして、それがこれまで彼らが速くても選手権で上位に立つことができない理由のひとつであることは間違いなかった。



初めて2位の表彰台に立ち、小林は高木とともにシャンパンファイトならぬスパークリング日本酒シャワーに酔いしれた。

今年のARTAは違う。誰もがそれを感じていた。

桜満開の春到来とはならなかったが、雨まじりの中にも晴れ間は見えてきた。

長い冬は終わり、新たな季節がやって来たのだ。



RESULT

GT500



ARTA NSX CONCEPT-GT NO.8 松浦 孝亮 / 野尻 智紀

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバースランキング
13位	4位	48.768	1'30.701	4位

GT300



ARTA CR-Z GT NO.55 高木 真一 / 小林 崇志

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバースランキング
3位	2位	42.376	1'38.792	2位

クルマをもっと楽しむために

モータースポーツ&カーライフ

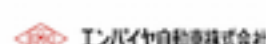
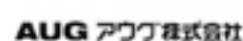
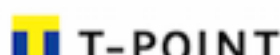
モータースポーツを“観て”“知って”“体験する”私たちamscはモータースポーツの応援を通して
スポーツが持つ夢・あこがれ・感動を体感し、豊かなクルマ社会の創造と発展に貢献してまいります。



AUTOBACS Motorsports Conference

オートバックス モータースポーツ連絡協議会

[amsc参加企業]



株式会社アスコット 株式会社アネブル 安全自動車株式会社 株式会社イササカ 株式会社ウェッズ Fデザインオフィス オカモト産業株式会社 コアーズインターナショナル株式会社
株式会社サンコー 株式会社サンテック 株式会社ジーエス・ユアサバッテリー 株式会社湘南レオテック 東京工科大学自動車大学校 日星工業株式会社 株式会社バンザイ
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン ブリッド株式会社 株式会社ホットスタッフコーポレーション マルカサービス株式会社 三菱重工業株式会社 株式会社ユビテル 株式会社ワッツ

2015年3月2日 現在会員企業

amsc (AUTOBACS Motorsports Conference) とは株式会社オートバックスセブンを中心に、自動車用品関連企業約100社が参加する任意団体であり、モータースポーツを核として「世界中のドライバーを車好きに変える」為に、自動車関連マーケット全体の活性化を目的とした団体です。将来的には、日本のモータースポーツ文化の発展と新たなカーライフ文化の創造に貢献していきたいと考えております。



Thank You for Supporting
Samantha Thavasa Japan Limited
Calm Flower
ARTA GALS



株式会社オートバックスセブン



ARTA Project



ARTA DIGITAL
Youtubeチャンネル

To be continued next race.....

ZERO BORDER
Team ZEROBORDER

Copyright c2014 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki YONEYA

Design and Web Creator : Akira YOSHIDA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO.,LTD